

町民文芸

只見短歌会

令和六年十月詠草

日々眺む浅草岳の残雪が消ゆれば間近新雪降るとふ

目黒 富子

関谷登美子

十月に入りて山並み車窓越し紅葉初めし心和みぬ

立花 奏音

恥ずかしき気持ちはとうに捨て去りて子供と踊る流行りのダンス

新国由紀子

朝の日の長く入りて秋を知る昼の温度は変はらず暑し

渡部ヨリ子

カメムシの異常発生を人等皆会話するのは深雪の心配

只見俳句会

十月定例会

日高俊平太 指導

人声に鯉の寄り来る秋の池
行く秋や名優の死を語り継ぎ

恒 夫

孫が子を抱いてうたた寝掘炬燵
小さき子に負けた真似するかるたとり

一 穂

みんなみん蝉四回鳴いて伸ばしけり
秋の雲トロツコ電車軋みおり

修 一

秋澄むや満蒙の歴史訪ねる
亡き友の思い出語る秋の暮れ

信

読み返す一行一行残暑かな
秋立つや先生のヒゲ剃ったらし

都

遠山をくるむ雲あり刈田道
長き夜や作家きどりの鼻めがね

味代子

鬼やんま羽化をみている通学路
槌音の心地よきかな郷の秋

一 恵

草刈を終えて手に持つ赤詰草
五時からの飯前仕事に西瓜切る

真理子

夕月や雲流れ行く過ぎし日を
秋雨ににじを見つめてぬくもりを

睦 子

良く動く物干に来て冬雀
母おわす如故郷よ日向ぼこ

礼